



年間第 32 主日 (ルカ 20:27-38)

主はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神

十一月に入りました。死者の月です。3日(木)には「瀬戸山墓地に眠る死者のためのミサ」が行われましたが、参加されたでしょうか。今週の朗読は、死者の月である十一月と結びつけると、学びが得られるかなあ、と考えました。

ふだんの生活であまり使わない言葉を知らないのは仕方の無いことかも知れませんが、この前NHK趣味の園芸でとある言葉が使われていて、その意味が分からずショックを受けたことがありました。プランターで野菜を育てるという内容でしたが、先生が生徒に「まめに見ておかないと『とう立ち』しますから気をつけましょう」と指摘して、生徒は先生に「分かりました」と答えていたのです。

ここで使われた「とう立ち」「とうが立つ」という言葉を、司祭館で尋ねたわけですが、すると「ほら、『とうの立つ』っていうじゃないですか」とそのまま返されました。調べてみるとどうやら、「茎が成長しすぎて、頃合いを過ぎること」を意味するそうです。知らなかった。

さて今週の朗読でも、「知らなかった」で終わらないように、しっかり学びを持ち帰りましょう。朗読の中で、イエスがサドカイ派の人々に指摘する部分「死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している」(20・37)を取り上げたいと思います。これは出エジプト記3章からの引用です。該当する箇所を読んでみましょう。

出エジプト記3章6節です。「神は続けて言われた。『わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。」これは神がモーセに語られた言葉ですが、モーセは神の声をどのように聞いたのでしょうか。

過去の偉大な人物を並べて、「これこれの人の神である」とただ言っただけだと受け取ったでしょうか。そうではなく、先祖たちは神から忘れ去られることなく、今も神のうちにあって生きていますと受け取ったのではないのでしょうか。先祖たちは、神が名前を呼べば、いつでも返事ができるようにその時を待っているのです。

アブラハムが生き生きと登場する物語を思い出しました。「金持ちとラザロ」の物語です。金持ちが死ぬと、「宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた」(ルカ16・23)とありまして、金持ちがアブラハムに叫ぶわけですが、「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。」(16・24)

これは当時すでに知られていた物語だと思われます。アブラハムは物語で生き生きと登場します。これだけでも、イエスが「神は死んだ者の神ではなく、生きています者の神なのだ。すべての人は、神によって生

きているからである」(20・38)と言ったことが十分うかがえます。イエスを信じるすべての人にとって、人は復活のその日を待って生きている人なのです。

人は寝起きして時間が進みますがこの時間には限りがあります。一方神を信じて眠りについた人は、眠っている時間は長いかも知れませんが、復活の希望があり、いつまでも神と共に生きることになるのです。

十一月、死者の月です。多くの人が身近な人を偲び、墓を尋ねて祈ることでしょう。墓に眠る人は、死の瞬間から復活の命が始まっています。次にお墓で祈るときには、ぜひ「復活の命が始まっていること」を心に留めて祈っていただきたいものです。

年間第 33 主日(ルカ 21:5-19)